第 13 回（令和 6 年度）「名古屋大学水田賞」

髙木 裕貴『近世ドイツ哲学における社交論』講評

髙木裕貴氏による本研究は、18 世紀末から 19 世紀初頭にかけてのドイツ啓蒙思想を代表する哲学者イマニュエル・カントの「社交論」と、そのカントに影響を与え、「ドイツ啓蒙の父」と呼ばれる哲学者・法学者クリスチャン・トマジウスの「社交論」とを中心に据えて考察することで、近世ドイツ哲学に関する研究上の空白を埋めようとするものである。

カント研究には 200 年以上にわたる蓄積があり、新しい考察の切り口を見つけること自体が難しいと思われるほどであるが、本研究の中心的業績である単著『カントの道徳的人間学――性格と社交の倫理学』（京都大学学術出版会、2023 年）は、これまで本格的にはほとんど研究されてこなかったカントの「社交論」を丁寧に掘り起こすことで、独自の新しいカント研究を成立させたと言うことができる。

著者は、『批判』期のカント哲学を前提とした上で、特に『道徳形而上学』『人間学』『教育学』といった晩年期の著作を中心に考察して、そこで展開されている「社交論」を論理的に再構成し、「社交論」がカントの「道徳的人間学」の不可欠の構成要素であることを明らかにした。著者の問題意識は明確で、詳細な「テキスト内在的」な読解によって、人間が自分で考え意志決定する「自律」という性格を形成するには他者とのコミュニケーションとしての「社交」が必要である、というカントの「社交論」の基本的内容と意義が説得力をもって説明されており、読み応えのある独創的な研究になっている。

また、思想史研究の方法についても明確な自覚があり、著者自身が「残された課題」とする「思想史研究」についても、コラムという形式で要約的にではあるが、ドイツとイギリス（とりわけスコットランド）の啓蒙思想史の文脈の中にカントの「社交論」を位置づけようとする意図が明示されている。ここからは、ドイツとスコットランドに即して啓蒙の比較思想史というテーマに資する新たな研究も期待できる。

髙木氏はすでに、カントから遡ってトマジウスの「社交論」についての研究にも一定の業績を上げており、ドイツ啓蒙における「社交論」の思想史という一つの分野を開拓しつつある。これまでクリスチャン・ガルヴェについては一定の研究蓄積があるものの、トマジウスからカントにいたるドイツ啓蒙の全体像の中で「社交論」の意味を明らかにした研究はまだなく、氏の今後の研究がドイツ思想史への大きな貢献となることは間違いない。

以上、本研究は思想史研究としての独創性と将来性を大いに評価できるものであり、「名古屋大学水田賞」授与にふさわしいと判断するものである。

名古屋大学
NAGOYA UNIVERSITY